

C-4 民族意識の形成

285. 民族意識の芽生え

言葉の論理性という観点から第一人称複数の『我々』というのは極めてあいまいな言葉である。「我々」に話相手は含まれているのか、いないのか判らない。この点については日本語より論理的といわれる英語の『WE』も同じである。

ところでインドネシア語ではこの点については論理的であいまいさはない。第一人称複数形は《キタ=kita》と《カミ=kami》の二つ言葉があり、前者は話相手を含み、後者は話相手は含んでいない。「yes」と「no」もはっきりしない(→582)インドネシア語では例外的に論理的なところである。

インドネシア人がオランダ人と政治問題について話す時、『kami』という言葉を意識したことが民族意識の芽生えであり、彼ら自身の言葉の論理性の所産であったに違いない。

植民地における原住民の民族意識とは自らを彼抑圧民族であり解放されるべき存在と自覚することである。この意味において民族意識の萌芽はカルティニ(→342)に見られるように洋式教育を受けた開明的な知識階級から始まった。オランダ語学校でオランダ人と一緒にオランダ語の授業を受けオランダ人以上に立派なオランダ語を駆使しても、現地人はオランダ人に対して被支配者である。この自覚が“kami”であり民族意識であった。

民族意識の目覚めの前にも抑圧された民族の抵抗はあった。ディボヌゴロ王子の率いるジャワ戦争が反オランダ運動の先駆けである。1888年にバンテン地区のチレゴンで起きた農民の反乱、あるいは1890年代の中部ジャワのブロラ地方起きたサミン運動(→714)といわれる反オランダ村落農民運動も評価されている。

インドネシア人に限らずアジアの全民族を鼓舞したのは日露戦争における日本の勝利である。白人に対するアジア民族の勝利は植民地の原住民の地位に甘んじていたアジアの諸民族の劣等感からの解放となり、植民地体制がほころびはじめる契機となった。

オランダの植民地政策は強制裁培制度(→282)の収奪による疲弊に対する反省もあり、1901年から開明的植民地政策として倫理主義政策(→283)の採用を余儀なくされた。住民の福祉を重視し教育を授けようとするもので原住民に海外留学の道も開けた。

しかしながら原住民への教育は民族意識を育む温床となり、民族主義思想に発展し、民族主義運動を行うようになる。自らの伝統と文化を教育によって民衆を啓蒙しようというタマン・シスワ運動も起きた。

インドネシア民族主義運動のルーツは様々である。人種意識からのもの、啓蒙思想からのもの、宗教からのもの、社会階層からのもの、社会主義思想からのもの、色々な流れの組織が合流して独立運動という大河に発展した。これら多くの組織に共通することは目覚めた知識階級の指導によるところが大きであった。

286. ブディ・ウトモ

1998年5月20日にスハルト大統領辞任を求める大規模な動員によるデモが計画された。結果的には当局の要請でそのデモは直前に回避されたが、デモを行うという圧力がスハルト大統領を追い込み、翌5月21

インドネシア専科

日に辞任の表明となった。

90年前の1908年5月20日にブディ・ウトモの第1回総会が開かれたことにちなみ、5月20日は「民族覚醒の日」の記念日である。スハルト大統領辞任劇を5月20日に舞台設定したことにインドネシア歴史上の意義がある。

植民地の原住民に許容された最高職位は医師になることであった。しかし医学を修める彼らは次第に人体の対症療法よりは植民地社会の存在そのものが真の病の病巣であることを意識するようになった。最優秀の原住民青年の集まる原住民医師養成学校は単なる医師だけでなく多くの民族主義者を育てる揺り籠であった。

ワヒディン(Wahidin Sudirohusodo 1857-1916)医師は教育の必要性を説き原住民の優秀な青年のために奨学金制度を呼びかけ、王室の一族やプリアイ(→629)に賛同者をえた。ワヒディン自身はジャワ文化を愛好するジャワの人格者であった。

若い医学生ストモ(Raden Sutomo 1888-1938)はワヒディンの影響を受け、ブディ・ウトモ(Budi Utomo)を組織し、1908年5月20日に第1回大会を開催した。ブディ・ウトモとはジャワ語で“最高の英智”という意味である。

ストモの提唱するブディ・ウトモの目的は教育による下級プリアイの社会的上昇を意図したものであり、彼の呼びかけに応じてジャワ人のプリアイのみならずジョグジャヤソロの王族関係者も参加した。

ブディ・ウトモはジャワ人の民族的自覚を促すことを目的とした団体であるが、文化活動に重点を置き、宗教色・政治活動はなく、大衆的基盤もなくジャワ人の上層階級のみが対象で会員数も1万人を超えなかった。

オランダの倫理主義(→283)論者からも原住民の目覚めとしてブディ・ウトモの発足が歓迎されたように植民地支配の打倒という意味での民族主義ではなかった。東インド政庁に対して協調的であり、親睦団体の枠を出ることがなかった。

育ちの良さ故の自制から次第に民族主義運動としては背景に退いたが、結果的には以降の澎湃として湧き起こるインドネシア民族意識においてブディ・ウトモはその覚醒の役割を果たし先駆者と位置づけられる。

政治的野心に関心の強いチプト・マングクスマ(→289)は、ブディ・ウトモから離れて東インド党を結成した。

プラムディヤ・アナンタ・トゥル(→990)の『人間の大地』4部作の第3巻『足跡』は民族意識が高揚する1900年代を描いた力作である。医学校に入学したものの、民族主義運動にのめり込む若い医学生の苦悩を描いている。

287. イスラム同盟

植民地体制の中で華僑は所定の役割を果たしてきたが、故国の辛亥革命によって華僑の意気は高揚し経済的進出は一層目覚しくなり、プリブミ(→680)の権益は蚕食されるがままになった。バティック(→926)というプリブミの伝統産業の分野にさえ、遠慮会釈も無く進出した華僑によって乗っ取られそうになった。

イスラム商業同盟の設立者であるサマンフディ(Haji Samanhudi 1868-1956)はソロの富裕なバティック業者

として名をなし、1904年にメッカに巡礼¹してハジの称号を得た。その頃ソロのバティック商人に対し華僑の経済的支配が顕著になった。

華僑は同郷や同族の会館を設立し団結していたのに対して、プリブミはバラバラであることが経済的に立ち遅れの原因であるとしてプリブミの団結を訴えた。1905年、ソロにイスラム商業同盟が発足し、ボイコットという手段で横暴な華僑の要求を退けた。

イスラム教徒であるとの自覚から発した連帯としてイスラム商業同盟は1911年に「イスラム同盟(Sarekat Islam=SI)」に発展した。インドネシア人という概念のなかった当時においてはイスラム教を軸にして始めてジャワのみならず外島の原住民の結集²が可能となった。



SIの発展は指導者となったチョクロアミノト(Cokroaminoto 1882-1934)に負うところが多い。彼は貴族出身の洋式の教育を受けた在野の知識人であり、彼の指導のもとにスラバヤを中心に組織は発展した。彼は演説がうまく、ジャワの伝説上の救世王のラトゥ・アディル(→339)の到来と信じられるほどカリスマの人氣があった。

後に大統領になるスカルノの父は学校の教師で、チョクロアミノトの知り合いであったことからスラバヤのHBS(高等市民学校)在学中の息子を彼に預け教育を任せた。スカルノはチョクロアミノトに私淑し、人心の把握術、思想の融和の技法について師から受けた影響は大きい。ちなみにスカルノはチョクロアミノトの娘と結婚(→442)した。

チョクロアミノトは、①イスラムに加え、②西洋近代思想、③土着の相互扶助、を結びつけ諸思想の融和に努めた。後のスカルノのナサコム(→380)の原型である。イスラムにも近代主義、保守主義の様々な価値観の寄り合いであり、イスラム尊重は華僑に代わりアラビア商人が横暴を極めるという側面もあった。

第一次世界大戦による社会不安からSIの大衆運動と労組運動は盛り上がりを見せ1919年には会員数は200万人に達した。と同時に年毎に急進化し独立と社会主義をも掲げるようになった。

社会主義者の進出に伴いSIの主導権をめぐるイスラム関係者との抗争になったが、社会主義者のスマラン派は排除された。排除された社会主義者は共産党となって大衆運動の主導権を握るようになった。残ったSIのジョグジャカルタ派は活力を失い、民族主義で一時的に高揚したSIはもとの宗教活動に戻った。

288. 社会主義思想

19世紀末からオランダ人やユーラシアン(→685)によって労働組合が設立され、1910年代に原住民に広がった。ロシア革命の影響を受けたオランダ人スネーフリート³が活動したが、1918年、オランダ人共産主義者

¹ 巡礼でメッカに集まったイスラム教徒は宗教的連帯のみならずヨーロッパ植民地帝国に対する批判の場ともなった。東インド政庁は自国のイスラム教徒がメッカ巡礼に出かけることに慎重であった。

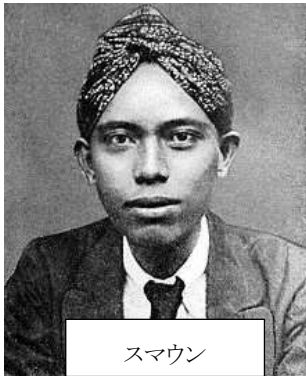
² スマトラ島南部ではイスラム同盟の影響を受け、サレカット・アバンがオランダの植民地支配に反乱した。スマトラ島北部のバタック人地域ではバルフダムダムという宗教活動が植民地支配に反抗したが、植民地政庁に弾圧された。⇒広末雅士「東南アジアの港市世界」2

³ スネーフリート(H.J.F.M.Sneevliet)は1883年オランダに生まれ、1913年にジャワ島に渡った。新聞の編集者をへて、1914年にスマランでオランダ人、ユーラシアン60名と東インド社会民主主義同盟を結成した。社会主義の宣伝により原住民活動家を育て1920年の共産党発足の基礎となった。スネーフリート自身は1918年に国外退去処分を受けオランダに戻った。コミテルンの工作員として中国で活躍したが、コミンテルンと対立し、共産党を追われた。オランダの下院議員になったがナチスの侵

は国外追放になった。

民族主義と社会主義は本来は別ものである。しかし民族主義の高まりは反帝国主義・反植民地主義の観点から社会主義思想の影響を受けるようになった。

社会主義者はイスラム同盟内の大衆運動の主導権をめぐり争ったが、チョコロアミトなどイスラム同盟幹部の“白派”は宗教に傾斜し大衆運動から遠ざかった。一方、スマランのイスラム同盟“赤派”は分離して、後に共産党に併合された。



スマウン

1920年にスネーフリートの一弟子のスマウン(Semaun 1899-1971)によってアジア最初の共産党が設立された。東部ジャワに生まれ鉄道員として働きながら労働組合運動で頭角を現し、スマランの鉄道従業員を中心に1921年には一万人の党員を獲得した。1919-1920は鉄道・製糖工場で激しいストライキによって賃上げを実現した。スマウンは1923年にストライキを指導して祖国を追放されて以降は影響力を失った。

共産党主導の大衆運動が先鋭化するにつれ弾圧が高まり、1924年にタン・マラカ(→295)、アリミン(Alimin 1889-1964)、ムソ(→326)、ダルソノなどの幹部は国外に追放された。

幹部をなくした共産党は暴走を始め共和国をも宣言した。1925年7月、スマランの印刷工場のストを狼煙^{のろし}として、病院、港湾へとストは広がった。1926年にはインドネシア各地で武装蜂起によって官吏住宅の襲撃、弾薬倉庫の爆破、集団強盗などの事件が頻発した。共産党は2/3を上納すれば1/3を得られるという条件で強盗をも認めた。

ジャカルタ刑務所、郵便局の占拠に失敗し、武装共産党員の破壊活動は鎮圧され、逮捕者13000人、投獄者4000人を出し、指導者と見られる1300人はタナ・メラ(→242)に流刑にされた。以後共産党は非合法化され、独立以降まで影を潜めた。

共産党武装蜂起の弊害は植民地政庁に共産党員のみならず、ついでに民族主義者まで逮捕する口実を与えたことである。共産党の独善によってインドネシア民族主義運動は足を引っ張られた。

しかしながらインドネシア民族主義者に社会主義思想が影響力を残したのも事実である。最終的にインドネシア独立を達成したスカルノ大統領はパンチャシラ(→365)の一つに社会主義を掲げ、今日もインドネシア型社会主義として定着している。

一時は壊滅した共産党は独立後、急速に勢力を盛り返したが、1948年のマディウンの内乱(→326)を引き起こし、独立戦争を戦うインドネシア陣営の足を引っ張った。

その後、再度、スカルノ体制において復活するも1965年9月30日事件(→384)を契機に徹底的に壊滅された。

今日のインドネシアでは共産主義は悪魔のごとき存在として忌避される後遺症だけを残し、反共はインドネシア人のDNAに組み込まれた。

攻によって1942年に銃殺された。

289. タマン・シスワ



デワントロ

パクアラム王家(→253)の一族の生まれであるデワントロ(Ki Hadjar Dewantoro 1889-1959)⁴は、貧乏のため医学校を中退し新聞雑誌の編集を行った。その際にブディ・ウトモ(→286)やイスラム同盟(→287)とも関わりを持ち、民族主義にのめりこんだ。

1912年、チプト・マングクスモ、ダウエス・デッケル(→687)とともに「東インド党⁵(Indische Partij)」を結成した。民族や宗教と関係なく全東インド住民を対象にして政治的要求を目指す最初の政党であったが、当局から警戒されて申請は却下された。

チプト・マングクスモ(Cipto Mangunkusumo 1885-1943)は医学校出であり、初期の民族主義者としてスカルノらに大きな影響を与えた。

折りしも1913年はオランダがナポレオン占領から解放された100周年にあたり、その記念式典が行われた。デワントロは『もし私がオランダ人ならば』という表題の痛烈な風刺論文を発表した。オランダの東インド植民地支配の現状をあげつらい、オランダが自らの独立を祝うことの矛盾をあてこすった内容である。

論文はオランダの忌諱^{きい}に触れ筆禍事件^{ひつつか}となり、デワントロ、チプト・マングクスモ、ダウエス・デッケル(→687)の3人もジャワを追放になりオランダに逃れた。

デワントロは西欧教育の優位を称える留学生の間であって伝統文化による民族主義教育の必要性を説いた。

インドネシア独立の民族主義の理念のもとに理想教育実践のため、デワントロはジャワに戻り、1922年、ジョグジャカルタで開校したのがタマン・シスワ(Taman Siswa)である。タマン・シスワは“学童の園”の意味である。

独立前の教育は、①植民地支配体制下のヨーロッパ式教育と、②因習的なプサントレイン(→733)というイスラム宗教教育があった。その中でデワントロは、③新しい教育路線を実行した。タマン・シスワの存在は西欧的近代化のみならず文化的伝統の再生による個性的民族国家を目指したものである。

タマン・シスワの思想に共鳴する民族主義者は高給の職をなげうって、奉仕に近い安い給料で教師を務めた。映画『バタビア子』でそれほど豊かでない家庭の少年がようやく念願がかない、歳後れでタマン・シスワに入学することになった心のときめきが印象的であった。少年にとってタマン・シスワとは単に知識を得る所ではない、メラ・プティ(→296)の掲げられたタマン・シスワは全人格的な存在であった。

独立後は公立学校でナショナル・アイデンティティー教育が行われるようになり、タマン・シスワの存在意義は風化したものの今日もおエリートの一貫教育の場として健在であり、インドネシアの代表的私立教育機関⁶である。

デワントロはタマン・シスワの指導者として教育活動に献身し、独立後の教育文化相などを歴任しインドネ



チプト・マングクスモ

⁴ デワントロは1923年の改名前の名のスワルディ・スルヤニングラット(Soewardi Soerjaningrat)でも知られる。

⁵ 東インド党の原語「Indische Partij」はオランダ語であってインドネシア語でないことに注目したい。

⁶ ジョグジャカルタのタマン・シスワにはデワントロの旧宅がデワントロ博物館が併設されており、遺品や蔵書が展示されている。⇒百瀬侑子「ジョグジャ雑記」

シアの教育活動に貢献した。

インドネシアの記念日である5月2日“教育の日”は彼の誕生日である。

290. インドネシアの発見

今でこそ【インドネシア】は世界に知れわたった有数の人口と面積を誇る国の国名である。しかし、インドネシアという用語が昔からあったわけではない。東南アジアの島嶼地域をさす地理学上の学術用語として1850年代頃より使用⁷され始めていたヨーロッパ語源の言葉である。近年になってヌサンタラ(→014)という用語が補完的に使用されている。

オランダは“東インド(→272)”と称していたが、東インドとはヨーロッパ中心軸の視点による地域名である。民族主義者にとってオランダ植民地支配の用語そのままの東インドは不愉快であった。その頃、インドネシアが新しい響きでもって現れた。

東インドではなくインドネシアという用語の使用が民族主義の自覚をもたらした。在欧留学生の「東インド協会」は「インドネシア協会」に改名した。1928年青年の誓い(→292)でインドネシアという言葉の政治的意味合いは決定的になった。

独立前まではインドネシアの用語の使用はあいまいであった。例えば独立前の民族主義者の主張にはマレー半島のマレー人のことをマレー半島の「インドネシア人」とか、フィリピンを「北インドネシア」という使用例が見られる。このようにインドネシアという国が成立するまではインドネシアの定義⁸は不明確なまま情勢の変化が先行した。

オランダへの非協調路線の政治団体はいうに及ばず、協調路線の団体といえどもインドネシアを名乗った。植民地政庁は『インドネシア』という用語に警戒したが、禁止はしなかった。公式には“東インド”と“原住民”で押し通した。

第二次世界大戦の際、蘭印(オランダ領東インドの略称)に攻め入った日本はインドネシア・ラヤ(→297)を高らかに鳴らし、日の丸とメラ・プティ旗(→296)を掲げた。

しかし、日本も一旦占領すると『インドネシア』という用語に慎重になった。インドネシアの独立を危惧する日本軍政は『蘭印』という地域名で貫き通した。ちなみに日本で『インドネシア』という用語が定着するのはインドネシア独立以降である。

ちなみに日本人はなにげなく『ネシア』と言い方をするが、日本に対するジャップと同じ軽蔑の意味に使われるので注意したい。

何れにしろインドネシアは【インドネシア共和国】として自ら独立を宣言することによって漠然とした地域名から確固とした国名になった。

「インドネシア共和国」のもとをただせば「オランダ領東インド」という植民地であり、ベネディクト・アンダーソン(→292)のいう“想像の共同体”である。しかしインドネシア共和国の求心力としてのナショナル・アイデンティ

⁷インドネシアという用語を最初に使用したのはシンガポール在住の英国人のR.ローガンといわれる。その際のインドネシアはオーストロネシア語族の居住するポリネシアなども含む地域であり、現在のインドネシアよりはるかに広範囲であった。地理学上の学術用語としてウォーレスがマレー群島と称した地域とインドネシアとほぼラップする。

⁸1945年7月の第2回独立調査会ではインドネシアの範囲をオランダ領東インドに加え、マラヤ、英領北ボルネオ、東ティモール、ニュー・ギニア島東部も含まれるべきだという意見が多数であった。⇒マイケル・リーファー著「インドネシアの外交」

ティーはインドネシア人自身の独立戦争の血の犠牲を伴う愛国心によって確立されたものである。

オランダ領東インドであったという理由だけで一つの国の存在理由となることの意味の重さは、英領インドがインド、パキスタン、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマー（ビルマ）といった国に別れている事からも明らかである。

291. オランダ留学生

植民地運営に倫理主義(→283)が導入されて優秀な原住民の学生にもオランダへの留学の機会が生じた。これらの留学生が西欧の近代主義に直に触れ、母国の実体を知るにつれ民族意識の自覚が発展するきっかけとなったことは歴史の必然でもあり皮肉でもある。

植民地ではほとんど口をきく機会もない民族の間にオランダ東インド植民地の同じ被支配民族として連帯感が生まれたのはオランダの学生街の下宿の屋根裏部屋であった。この連帯感がインドネシア民族意識へと拡大していった。

オランダ留学生の親睦団体として発足した東インド協会は 1907 年に協会名をオランダ語からインドネシア語に変更し、1923 年にインドネシア協会に改名した。故国の首都はオランダ命名のバタビアに代わりジャカルタ(→153)が用いられるようになった。

1926-27 年にインドネシアの多くの若者が西洋に留学した。永積昭教授はインドネシアの青年が思想を求めたランタウ(→611)の時代としている。オランダ留学生のすべてが民族主義運動に関心を持つ高揚の時代であった。多くの留学生は社会主義・共産主義運動にも共鳴した。オランダ留学生は“スルー・インドネシア・ムダ(Suluh Indonesia Muda) = 若きインドネシアの松明”であった。

留学生はヨーロッパから植民地体制を批判したが、一方では西欧的民主主義の影響をも受けた。留学生の代表であるハッタ(→443)は資本主義に代わって社会主義



スカルノ

主義経済を民族主義の中軸にすること、協同組合による集

散主義を唱え、低い声で講義のように経済を説いた。故国ではインドネシア国民党のスカルノ党首が逮捕され風雲急をつげた。シャプリル(→444)は故国へ帰国し、1931 年インドネシア国民党の後継としてインドネシア国民教育協会(PNI-baru)⁹を設立し、1932 年に遅れて帰国したハッタが議長になった。PNI-baru は西欧的民主制度の確立と近代的自我の育成を唱導した。

ナショナリストといわれるインドネシアの民族主義運動はスカルノとハッタの二頭での馬車であった。スカルノは情念としてのオランダからの独立であり解放であったのに対して、ハッタは理性としてのオランダからの独立であり解放であった。インドネ



ハッタ



スタン・シャプリル

⁹ インドネシア国民教育協会は(Pendidikan Nasional Indonesia)はジョグジャカルタで結成された。インドネシア国民党(PNI)がスカルノ党首の逮捕で活動が停滞したため、インドネシア国民教育協会が後継の役割を果たしたので新国民党(PNI-baru)と称された。シャプリルの指導のもとに西欧的民主主義をとえ、次第にスカルノのジャワ土着的思想と溝が生じるようになった。後のインドネシア社会党につながる。

シアの大衆は指導者(スカルノ)に導かれる^{あひる}家鴨の行列でなく、国民に人民主権を目指す教育をほどこすことが先決であるとハッタは考えた。オランダ植民地主義という共通の敵がある間は両者の連携は車の両輪のごとく機能した。

1934年にシャプリル、ハッタも逮捕されタナ・メラ(→242)に流刑にされた。非協調路線の民族主義者はすべて牢獄か流刑地であった。

独立後、西欧的民主主義を尊重する政治思想はハッタよりさらに西欧的思想の感化を受けたシャプリル首相の下に実践され、インドネシア社会党¹⁰に引き継がれたが、1960年に地方の反乱(→378)に連座して活動停止になった。インドネシアの政治思想において西欧的民主主義は傍流に追いやられた。

292. 青年の誓い

1928年10月28日、第2回青年の集いが催された。インドネシアの歴史において輝かしいこの日は“青年の誓いの日”として今日も祝日ではないが独立記念日に準じる扱いを受け、盛大な祝賀行事が行われる。

原住民の民族意識の高まりに^{おび}怯えたオランダ植民地政庁は原住民の集会を制限するようになった。しかし東インド植民地支配下の全島から青年が集まるという集会は当局も認めざるをえなかった。禁止した場合の反動の恐れと青年ということで甘く見たからかもしれない。青年の集いは前年に結成されたインドネシア国民党(→293)の指導を受け、インドネシアの独立に繋がる意義ある集会となった。

ここでいう“青年=pemuda”の意味は生物学上の年代のことではない。西欧教育を受けた最初の集団のことであり、進歩、革新、ダイナミズムを意味した。西の方、1908年にオスマントルコ帝国から政権を掌握した“青年トルコ党”とあい通じた。ちなみにインドネシア語で慣用の若者とはルマジャ(remaja)である。

全地域の原住民が集まる集会に向け周到に用意された。【青年の誓い(Sumpah Pemuda)】として決議された内容は次の有名な3ヶ条である。

1. 我々インドネシア青年男女はインドネシア国というただ一つの祖国を持つことを確認します。
2. 我々インドネシア青年男女はインドネシア民族というただ一つの民族であることを確認します。
3. 我々インドネシア青年男女はインドネシア語という統一言語を使用します。

決議は短くスローガンとして「一つの国家⇒インドネシア国、一つの民族⇒インドネシア人、一つの言葉⇒インドネシア語」に要約されて普及した。今日も学校教育で繰り返されている神聖フレーズである。全国から集まった歴史も文化も異なる多様な民族の青年達がインドネシアという一つの共同体の実現に未来をかけた意義は大きい。

ちなみに1930年代はヨーロッパではドイツのヒットラーの隆盛し、親衛隊がヒットラーに忠誠を誓う『一つの国家、一つの民族、一人の総統』のスローガンがある。ドイツのヒットラーの隆盛にオランダが困惑したはずである。青年の誓いのスローガンはインドネシア人が故意に広めたナチのスローガンのパロディでもあろう。

インドネシアはベネディクト・アンダーソン¹¹のいう“想像の共同体”はインドネシア語を媒介として国家・民

¹⁰ インドネシア社会党(PSI=Partai Sosialis Indonesia)は社会党からシャプリル派が分離独立した。社会党は独立戦争期のインドネシアの政権を担当してきた。PSIはシャプリルを核とした西欧型民主主義を指向するインテリ集団で高級官僚や開明派軍人を支持層とした。しかしスカルノ体制の確立に伴いスカルノ大統領に批判的であったことから地方の反乱に連座して活動停止になった。PSIは選挙には弱い小政党であったが、人材が厚く、スハルト体制で要人を輩出した。

¹¹ ベネディクト・アンダーソン(Benedict R.Anderson)はコーネル大学教授でインドネシアのナショナリズムの検証からインドネシアにおける国家とは国語を媒介にした「想像の共同体」とした。難解な論旨で理解困難である。

族・言葉という形でインドネシア・アイデンティティが具体化した。植民地からの解放という現状打破をさらに進め、新国家の創造に向って、民族主義者の理念が“インドネシア”という言葉に収斂された。

後にインドネシア国歌となる『インドネシア・ラヤ(→297)』がスプラットマンによって始めて披露されたのもこの青年の集いの場であった。

青年の誓いが行われた建物はジャカルタのクラマト通り 106 番地に記念館として保存され公開されている。そこにはインドネシア・ラヤの演奏を聞き入る若き日の民族主義者の蠟人形が展示されている。

293. インドネシア国民党

オランダ植民地当局の弾圧を受けながら独立を目指す民族主義運動の主流となった指導者はオランダから帰った留学生や ITB(→108)などの高等教育卒業者であった。この中で頭角を表したのがスカルノである。1926 年工学士の学位を得て ITB 建築学科を卒業したスカルノは「家を作るより国を作る」と民族主義運動に没頭し、彼の指導のもとに宗教、社会主義思想などに様々なインドネシア民族主義運動は一つの収斂していった。

おりしもオランダ留学生のインドネシア協会(→291)出身者がインドネシア各地の都市で研究会を組織していたのを大同団結して 1927 年に誕生したのがインドネシア国民党 PNI (Partai Nasional Indonesia) である。

PNI の幹部はインドネシア協会出身者が多く、スカルノを党首とするインドネシア民族主義運動の正嫡子としてバンドゥン(→107)が新しい民族主義運動の中心地になった。

民族主義運動で先行していたスラバヤ、ジョグジャカルタはイスラム同盟、スマランは社会主義を引きずっていた。と同時にジャワという“しがらみ”も引きずっていた。バンドゥンはジャワ島ではあるがスンダ人(→612)の地であった。インドネシア語が中立であったように、インドネシア独立運動の地としてバンドゥンはバタビアにも近く最適地であった。仮に中部ジャワに本拠を構えた場合、スマトラ島出身者がノコノコと出かけるには心理的抵抗があったであろう。

1929 年 12 月 29 日、当局は PNI 幹部 180 名を一斉検挙した。スカルノは裁判で争ったが、4年の禁固刑でスカミスキン刑務所に投獄された。刑務所は白人用の 1 等、中国人用の 2 等、プリブミ用の 3 等があったが、大物のスカルノは 1 等扱いであった。1931 年末、恩赦で釈放された際は出迎える民衆で沸き返った。幹部が入獄し不在の間のスカルノに代わるべき指導者がなく PNI は解散し、後継者のサルトノ(Sartono)はインドネシア党(パルティンド Partindo)を組織したが、シャフリルは解党主義と批判して新たにインドネシア国民教育協会を組織した。

出獄したスカルノは指導者としてパルティンドに参加し、インドネシア教育協会はスカルノとの間に距離ができはじめた。スマトラ島出身のハッタ、シャフリルの知識層にとって、スカルノの政治思想は無原則統一主義であり、そのバックボーンのジャワ神秘主義(→707)に対しても違和感があった。

スカルノ、ハッタ、シャフリルなど主要指導者は全て流刑になり、日本の占領によって解放された。その間インドネシア独立の主流はスカルノのカリスマ性を伴う指導力で維持され、ハッタはスカルノに違和感をいだきつつスカルノを指導者として立て、独立後は副大統領としてスカルノ大統領に協力した。ちなみに両者は最後は決別する。

独立後、PNI はスカルノ大統領の与党として復活した。1955 年の選挙では四大政党の一つの勢力を誇示したが、スハルト政権によって PNI は他の政党とともに PDI(→393)に統合された。

⇒493.スカルノの生い立ち

294. 協調路線の限界

オランダは倫理主義政策(→283)の一環として 1918 年に国民参事会(フォルクスラート Volksraad)を発足させた。国民参事会は総督の諮問機関であり議決機関でない。発足当時の議員の割当てはヨーロッパ人 20 名、原住民 15 名、外来アジア人(華僑)3 名であった。

1931 年に定員を従来の 38 名から 60 名に増員して半数を原住民(インドネシア人)に割り当てた。オランダ語と並んでムラユ語(→957)を国民参事会の討論の公用語とした。

高まる民族主義の声にオランダは倫理主義をかなぐり捨ててスカルノ、ハッタ、シャフリルを逮捕し流刑にしたが、一方では協調路線の穏健な民族主義者を国民参事会に登用し民族主義運動を懐柔した。



スタルジョ

原住民官僚層の指導者で参事会の議員であったスタルジョ(Soetardjo 1882-1976)は 1936 年、植民地の自治拡大への漸進的改革のためオランダと東インドの対等の協議会の設置を求める請願を行った。

スタルジョの請願はオランダ人議員の賛同をも得た穏当な内容であったが、オランダ本国は拒否した。インドネシア人のオランダへの失望は次第に絶望になった。

ブタウィ人(→690)の医師タムリン(Muhammad Husni Thamrin 1894-1941)は穏健な民族主義運動の指導者として国民参事会の議員であった。1935 年ブディ・ウトモ(→286)などとの合体により大インドネシア党¹²=パ lindra PARINDRA (Partai Indonesia Raya)が成立し、タムリンはその指導者になった。

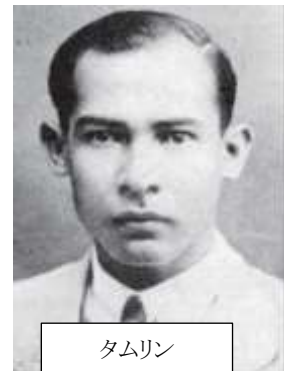
大インドネシア党は改良主義的ブルジョア民族主義政党であるが、野党の立場を明確にしてメラ・プティ(→296)、インドネシア・ラヤ(→297)、インドネシア語の使用など合法的に民族の自治拡大を要求した。

タムリンはインドネシアの自治獲得(独立ではない)を目標に大同団結を訴え 1939 年にガピ¹³を結成しオランダに呼びかけたが、オランダからは無視された。

1940 年 5 月、ヒットラーのドイツ軍はオランダに侵入した。オランダ首相はウィルヘルミナ女王を担いで軍艦でロンドンに亡命した。在バタビアの東インド総督チャルダ・スタルケンボルフは女王に忠誠を誓うとともにアジアでの戦争開始に備えインドネシア人の政治的要望を取り入れるゼスチャーを示した。

協調路線のタムリンでさえも 1941 年 1 月に逮捕された。日本と通じることを警戒されたためといわれる。タムリンは逮捕の 4 日後に当局が差し向けられた医師の診察後急死した。死因は不明とされているがインドネシア人は毒殺であると信じている。

タムリンは政治路線の差を越えてスカルノの理解者であり庇護者であった。独立後タムリンの名は首都ジャカルタの最重要幹線のタムリン通(→160)にその名を残している。



タムリン

¹² 大インドネシア党(パ lindra PARINDRA)は Partai Indonesia Raya の日本語訳である。ラヤ(raya)は国歌のラヤと同じ“偉大な”という意味であり、地域的な意味ではない。

¹³ ガピ(GAPI)はインドネシア政治連合(Gabungan Politic Indonesia)は 1939 年 5 月結成された。

1941年12月8日、日本の真珠湾攻撃に対してオランダ亡命政権は日本に宣戦を布告した。女王はロンドンからインドネシア民族がオランダ植民地軍に協力するよう呼びかけたが、その声はむなしく響いた。

295. 民族的社会主義



タン・マラカ

ミナンカバウ人のタン・マラカ(Tan Malaka 1897?-1949)はインドネシア独立時の民族社会主義者である。ブキティンギの師範学校でオランダ人教師に可愛がられ、その教師の援助でオランダ留学したが、その間にマルクス主義に傾斜した。

帰国後はインドネシア共産党員として活躍、1921年に議長に就任している。1922年にストライキを指導したことから国外追放となり、以降25年間の亡命生活を余儀なくされた。

この間にフィリピン、中国、シンガポールの国外を点々としてオランダのみならず米国、英国の探索の目をかすめながらコミンテルンの下に東南アジア革命運動を指導した。1926年にタン・マラカ自身の反対にもかかわらず、インドネシア共産党の武装蜂起によって官憲の一層の弾圧を招いた。

それ以降、タン・マラカは共産党を離れ民族社会主義を指向する独自の路線を走り、ハエルル・サレやアダム・マリクの青年グループ(→315)に影響を与え崇拜された。

メダンのジャーナリストによる「紅はこべ」というタン・マラカを主人公に擬した冒険小説がある。不思議な人間魅力とあいまって変幻自在の活躍ぶりを描いたものである。広汎な読者を得、神秘的な人物“赤い恋人”としてタン・マラカの名を高めた。

太平洋戦争が開始してから密かに帰国し、西部ジャワのバヤ炭坑(→117)に身を隠し事務職として潜伏して時を待った。日本の敗戦後、公衆の前に姿を現わした。著名であるにもかかわらず実像が不明であっただけによく生きていたという驚きを与えた。

独立戦争当時、スカルノとハッタは対日協力者という前歴から身動きしにくく、日本との関わりのなかったタン・マラカとシャプリルが主導権を争った。武装抵抗派タン・マラカと外交交渉派シャプリルが激しく対立し、スカルノ、ハッタはシャプリルについた。1946年3月に逮捕され獄中にあっただが、7月3日事件(→376)の責任¹⁴を問われた。

もつれる政争の中で彼は捕われて『牢獄から牢獄へ』という全3巻の自叙伝を牢獄で書いている。1949年の不慮の死について軍によるものとされているが、事件の詳細は不明であり謎に満ちた一生¹⁵を終えた。

タン・マラカは階級より民族統一を優先するという点で、ドグマにおちいった共産党とは一線を画した。共産思想であるが底流にはロマン主義が流れている。イスラム教を反帝国主義勢力として高く評価しイスラム教との連携をとらせた。民族主義に基づく徹底抗戦の思想はベトナムのホーチンミンに通じるものがある。



アダム・マリク

¹⁴ シャプリルに反対するタン・マラカは1946年3月以降、獄中にあっただ。6月28日未明のシャプリル拉致事件によって全権を把握したスカルノ大統領はタン・マラカのクーデターがあっただとして反政府系の政治家を一斉に逮捕した。いわゆる7月3日事件はオランダとの外交交渉に革命を唱えて反対する反政府勢力一掃のための政治劇と見られる。

¹⁵ 1949年2月、タン・マラカはマラン市近くのプリンビン村で殺害され、遺体はブランタス川に捨てられた。タン・マラカは民族主義を唱えたため、ムソなどソ連の影響の強い共産党とも対立していた。

独立戦争の最中の政争の中でスカルノ大統領は自分の後継者をタン・マラカにするという文書を残したこともあるらしい。

タン・マラカの民族社会主義はムルバ党(→377)としてスカルニ、ハエルル・サレ、アダム・マリクなどの45世代(→319)によって引き継がれた。しかしムルバ党は共産党と対立し、スカルノ大統領の親共産党政策によって1965年に解党させられた。

296. 国旗/メラ・プティ



メラ・プティ(merah putih)の直訳は色の「紅白」という意味であり、日の丸が日本国旗¹⁶であるのと同様に上が紅、下が白のインドネシア国旗のことである。1920年代にオランダ留学生在が連合の印に使用し、国内の民族主義者にも受け入れられるようになった。インドネシア国民党(→293)が率先してメラ・プティを用いた。ミナン人の民族主義者ヤミン(Mahammand Yamin 1903-

62)はロマンに満ちた英雄伝や国民史を著して民族主義を鼓舞した。1951年にインドネシア史を『6000年の紅白旗』の本にした。

紅白旗の歴史はマジヤパヒト王国(→248)に遡る。以降、代々の王家は紅白旗を使用し、マタラム王家(→250)では祝祭日にジョグジャカルタ、スラカルタの全市で掲揚された。

色の意味は紅が(男性のエネルギー)、白が(女性の純潔)を表すという。あるいは《天と地》、《太陽と月》をも象徴している。紅白旗はグラ・クラパ(gula kelapa)ともいわれる。グラは砂糖、クラパは椰子である。インドネシアでは砂糖は未精製の赤いものを使う。椰子の実は乳白色である。何れにせよ紅白はインドネシアで目出度い色とされているのは日本と同じである。日本では紅白饅頭があり、赤飯が炊かれるように、インドネシアではお祝いの儀式には紅白粥が炊かれる。

後に分ったことであるが、上下紅白旗はモナコの国旗と同じであったので、調整が試みられたが、どちらも譲らなかった。インドネシアとモナコの国旗は同じであるが、正確には長方形の縦横の比率が少し異なるらしい。また紅白の上下をひっくり返すとポーランドの国旗になる。

ちなみにオランダの国旗は赤・白・青の3色である。スラバヤの戦い(→321)の前哨戦であるが、日本の敗戦で解放されたオランダ人がオラニエ・ホテル¹⁷の屋上にオランダ国旗を掲げた。それを見た勇敢なるインドネシア人が建物によじ登り、三色旗の青の部分を引き裂いて紅白旗にした。姿形は悪くてもインドネシア独立を象徴する出来事であった。オランダ復帰の最初の旗がインドネシア国旗に改造されたエピソードは全インドネシア人が周知である。

モナスに(→158)に防弾ガラスつき15kgの金装飾のケースに神器のごとく保管されている国旗は1945年8月17日の独立宣言(→318)の際に有り合わせの布を使って当時のスカルノ夫人のファトマワティ(→442)が一晩で縫い上げた¹⁸ものである。

¹⁶ 日本は第二次世界大戦時にインドネシアへ侵攻するにあたり、日章旗も紅白であることを強調し、インドネシア人の歓心を買おうとした。

¹⁷ ホテル・オラニエ(Oranje)はマンダリン・マジヤパヒト(Mandarin Oriental Hotel Majjapahit Surabaya)と改称し、コロニアル風趣のスラバヤの一流ホテルとして現存している。当初のオラニエの名の由来はオランダの名君オレンジ公のことである。国旗事件は1945年9月19日午前6時のことである。ホテルには国旗の故事の銘板と大きな絵画が展示してある。

¹⁸ スカルノ夫人の縫い上げた国旗は「Sang merah putih」といわれ、国宝である。毎年独立記念日に各州代表の青年によって

後にスカルノ大統領が第二夫人を迎えた時に第一夫人に同情が集まったのも独立宣言時の国旗にからむ故事も無関係ではなかろう。インドネシアを旅行すると国旗の多さに気付く。官公庁では毎日国旗掲揚が行われる。

ところでインドネシアの紅白戦は日本の大晦日の歌合戦と異なり血なまぐさい。アンボンの宗教対立の暴動事件(→737)でイスラム教徒は白装束で暴れた。対するキリスト教徒は赤装束で武装した。イスラム過激派の白に対し距離を置くイスラム教徒は緑派といわれる。

⇒825.バルセロナの紅白旗

297. 国歌/インドネシア・ラヤ

インドネシアの歴史において有名な 1928 年の第2回インドネシア青年会議(→292)において銘記されるべきエピソードは作詞作曲家スプラットマン(Supratman 1903-37)によって「インドネシア・ラヤ Indonesia Raya=偉大なるインドネシアの意味」が始めて披露されたことである。

大会の2日目の休憩時にスプラットマンは議長に自分の歌を歌わせてほしいと懇願した。自らヴィオリンで演奏によるインドネシア・ラヤの格調の高い歌詞と旋律は参会者に深い感銘を与え、アンコールの連呼に迎えられた。青年の誓いが決議されたのはこの直後であった。

この歌はその後にも民族主義者の集会で歌われた。議論が沸騰し険悪になった時もインドネシア・ラヤが演奏されると和やかになった。この歌によってインドネシア民族意識はいやが上にも高揚し、インドネシアの独立と解放を求める人々の音楽のシンボルとなった。こうなれば植民地政庁も放置できずにインドネシア・ラヤを禁止した。

太平洋戦争の勃発とともに事前調査に怠りのなかった日本はラジオでインドネシア・ラヤを放送し、日本の始めた戦争がインドネシアの解放であるがごとく訴えた。日本軍はインドネシア・ラヤを大量にレコードに吹き込み、拡声器の歌声とともにインドネシアに攻め入り民衆から歓呼の声に迎えられた。

しかしオランダ軍を打ち破り蘭印の占領が完了すると、この歌の持つ民族主義思想を警戒して日本軍は禁止した。大量に用意されていたレコードが密かに処分されたという。

インドネシア人の強い要請に応え軍政末期に解禁になった。晴れてインドネシア独立とともにインドネシア・ラヤは国歌に採用された。

1945年8月17日の独立宣言の際、スカルノ邸の前で参会者はインドネシア・ラヤを斉唱し、間にあわせのメラ・プティが掲揚された。

ジャカルタ生まれウジュン・パンダン育ちのスプラットマンは民族主義運動の影響を受けた。新聞記者となり富裕層を攻撃する小説を書いて発禁にされ作曲家に転身した。国歌以外の曲は知られていない。何れにせよ34歳の短い生涯であった。

独立後スプラットマンは国家英雄(→344)となった。インドネシアの国家英雄は称号のみならず遺族には年



スプラットマン

国宝旗掲揚の儀式が行われる。

インドネシア専科

金がでるらしい。しかしスプラットマン夫人には年金は支給されずスラムに暮らしていた。その理由はスプラットマンがイスラム教による正規の結婚手続きをしていなかったからである。当時の民族主義者には社会主義思想の影響を強く受けており、民事への宗教の介入を忌避するのが一種の流行であったようである。

1999年6月から5万ルピア札紙幣にスプラットマンの肖像が使用されている。前任のスハルト大統領肖像の紙幣はわずか5年で繰り上げ廃棄処分になった。

⇒826.ハローハローバンドウン

